

劉白聯句詠注稿（十五）

橘 英 範

はじめに

本稿では、前号に続き、⑧「西池送白二十二東歸兼寄令狐相公聯句」の残りを扱うこととする。

⑧西池送白二十二東歸兼寄令狐相公聯句（つづき）

15・16 謝公深眷盼、商皓信輝光

〔謝公深眷盼〕謝公が深く目をかけている。

この句の解釈については諸説あり、陶注は謝公は西晋の謝安をいい、裴度を指すとして、「眷盼」の対象については触れない。蔣注も謝安をいい、裴度を指すとするが、令狐楚を指している可能性もあることを指摘する。そして、「眷盼」の対象を白居易とする。一方柴注は、「謝公」は西晋の謝混をいうとし、謝混が尚書左僕射となったことから、元和十四年（819）に檢校左僕射・同中書門下平章事・太原尹・北都留守・河東節度使となった裴度を指すとする。そして、春景を詠じた謝混の「遊西池」（『文選』二二）は古くから定評があること、また江淹の「雜體詩

三十首」（『文選』三〇）では「謝僕射混遊覽」として「眷然として良辰を惜しみ、徘徊して落景を踐む（眷然惜良辰、徘徊踐落景）」の句があることを指摘される。さらに、口語訳に「僕射の裴相公は洛陽の令狐相公を懐かしんでいるが」とあり「眷盼」の対象を令狐楚と解しているようだ。

「謝公」の語は、例えば『世說新語』には八〇例見えるなど（ちなみに全て謝安を指している）、散文には多くの例があるが、唐までの詩に見える二例は、ともに「謝」は動詞で「公〇」に謝す（謝公〇）という例。唐に入ると用例が増え、『全唐詩』には一九七例が見えるようだが（寒泉 <http://lib.tupm.gov.tw/s25/index.htm> で検索し、その結果を四庫全書電子版の検索結果と対照した）。そのうち、重複するものと「公〇」に謝すの例、そしてこの聯句の例を除けば、一八四例となる。

この一八四例を、陳貽煥主編『增訂注釈全唐詩』（文化芸術出版社、二〇〇一年）を中心に、他に注釈書がある詩人についてはそれらも参照しつつ調査したところ、一八一例が謝靈運（約八〇例）・謝安（約六〇例）・謝朓（約四〇例）の三者で占められている（注釈書によって説の異なるものや、一つの注釈書であっても両論併記してあるものもあるが、異説・

両論併記の場合でもこれら三者間のもは、穏当と思われるものいづれかに含めて、概数を記した。また注釈が施されていないものは、卑見によって分類した。

残る三例は、まず錢起の「和慕容法曹尋漁者寄城中故人」(全三三九)に「勝事宛然たり 懷抱の裏、頃來このころ 新たに得たり 謝公の詩(勝事宛然懷抱裏、頃來新得謝公詩)」というもの。『増訂注釈全唐詩』は謝靈運または謝朓のこととするが、阮廷瑜『錢起詩集校注』(新文豐出版社、一九九六年)は、謝惠連が法曹行參軍になっていることから、詩題にいう慕容法曹を謝惠連に喩えたものとする。

次に孫元晏の「小兒執燭」(全七六七)に「謝公の情量 已に量り難し、忠宋の心誠 豈に暫らくも忘れんや(謝公情量已難量、忠宋心誠豈暫忘)」という例。これは『増訂注釈全唐詩』に注する通り、齊の高帝が相だった頃、夜謝朓を召し出し、人払いをして話をしたが朓が終始無言なので、燭を執る二人の子供のためかと思ひ、その子供も下がらせたという故事(『南史』王儉傳)を用いており、「謝公」は明らかに謝朓を指している。もう一首は貫休の「上新定宋使君」(全八三五)に「十年勤苦して

今酬をばいりぬ、句を桐江に得て 謝公に識らる(十年勤苦今酬了、得句桐江識謝公)」という例で、『増訂注釈全唐詩』は、袁宏が無名だった頃、江上で自作の詠史詩を吟じていたのを、鎮西將軍の謝尚が聞きつけ賛嘆したことによって有名になったという故事(『晉書』文苑傳。『世說新語』文學にも見える)を引いており、「謝公」は謝尚を指していると思われる。以上のように、唐詩に見られる「謝公」はほとんどが謝靈運・謝安・謝朓の三者であり、この三者でないわずかな例の中にも、謝混を指す例は見られなかった。またこの三者はその名や字で検索しても多くの例が

ヒットするのに対し、謝混はその名と『文選』や『文心雕龍』における呼称である「叔源」、「世說新語」・『詩品』で見られる「益壽」で検索しても、孫元晏の「謝混」(全七六七)に「憐れむべし 謝混 春華在りて、千古 翻かへつて傳ふ 禁きん欄らんの名(可憐謝混春華在、千古翻傳禁欄名)」という、詩題と詩中の計二例が見えるのみである。晉の孝武帝から婿選びを相談されて謝混を推薦した王珣が、袁山松が謝混と縁組みしようとしていると聞いて、「卿 禁欄に近づく莫かれ(卿莫近禁欄)」(『きみ、天子のお料理に手を出すな』)と言ったという、『世說新語』排調・『晉書』謝混傳に見える故事を詠じたもの。

また、先に見たように、江淹の「雜體詩」(前出)は「謝僕射混」としていたが、『全唐詩』において僕射と謝氏を結びつけた例は、管見では一例、韓翃の「寄上田僕射」(全二四五)に「僕射 戎に臨む 謝安石、大夫 憲を持す 杜延年(僕射臨戎謝安石、大夫持憲杜延年)」というものである。これは『増訂注釈全唐詩』も指摘する通り、明らかに尚書僕射であった謝安が淝水の戦いで苻堅を敗った故事(『晉書』謝安傳)を用いており、法の執行で公平だったという漢の御史大夫・杜延年の故事を用いた下の句とともに、詩題にいう田僕射、すなわち大暦二年(767)に御史大夫を兼ね、翌年に檢校右僕射を加えられた汴宋節度使の田神功を比喻している。

以上のように、唐詩の中で「謝公」といえば、まず想起されるのは謝靈運・謝安・謝朓であり、また、謝混が詠じられることは極めて稀のようである。

さらに、謝混は確かに「遊西池」の詩で名高いが、④の聯句の第二〇句の【語釈】で述べたように、「西池」は必ずしも常に謝混とのみ結び

つく詩語とは限らず、また、謝混の「遊西池」の作は、ひとり西池に遊んで風景を愛でながら、約束を違えた友を待ちわびる内容となっており、一人離れて参加できない令狐楚に送る意図をも持つとはいうものの、やはりこの聯句とは趣を異にする作品といえるだろう。江淹の「雜體詩三十首」(前出)に「眷然として良辰を惜しみ、徘徊して落景を踐む」の句があること関しては柴氏の指摘される通りであるが、この擬作詩も「遊西池」と同様、ひとりで遊覧して友を思う作になっている(なお、謝混はこの「遊西池」と『宋書』謝弘微傳に引かれる、弘微や靈運といった族子たちへの訓戒の詩のほかは、断片とおぼしき詩を三首残すのみである。謝混の生涯と評価、「遊西池」詩の持つ文学史的意味等については、石川忠久氏「謝混と『遊西池』詩」に詳しい。もと『桜美林大学中国文学論叢』第八号、一九八二年、のち『陶淵明とその時代』、研文出版、一九九四年)。

以上のことを総合すると、やはりこの「謝公」の表現から謝混を指しているとは解釈するのは少々無理があるように感じられる。

それではこの「謝公」誰を指しているかということになるが、他の諸注の指摘する通り、謝安を指しており、謝安によって喩えられているのは裴度であると解釈するのが穏当であるように思われる。

先述のように、唐までの詩には「謝公」でまとまる例はないので、『全唐詩』中の「謝公」の例のうち、謝安を指したものを以下にいくつか引いてみたい。

宋之問の「傷王七秘書監、寄呈揚州陸長史、通簡府僚廣陵、以廣好事」(全五一)に「白屋 魏主に藩たり、蒼生 謝公を期す(白屋藩魏主、蒼生期謝)」の句がある。東山で隠遁していた謝安に対し、高崧が「安

石 肯て出でずんば、將た蒼生を如何せん(安石不肯出、將如蒼生何)」という庶民のことを引いたという故事(『世說新語』排調・『晉書』謝安傳)に基づくもので、魏の文侯が国の藩屏として段干木を厚遇したという故事と対になっている。李白の「攜妓登梁王棲霞山 孟氏桃園中」(王本二〇)に「謝公 自づから有り 東山の妓、金屏 笑ひて坐す 花の如き人(謝公自有東山妓、金屏笑坐如花人)」というのは、東山隱棲時代の謝安が、妓女を連れて丘壑の風雅に遊んだという故事(『晉書』謝安傳)を踏まえたもの。また、耿津の「和王懷州觀西營秋射」(全二六九)に「謝公 親しく武を校す、草は碧にして 露は漫漫たり(謝公親校武、草碧露漫漫)」というのは、謝安が都督揚豫徐兗青五州等諸軍事や征討大都督といった軍事上の要職についたことから、詩題にいう懷州刺史王某(前掲『增訂注釈全唐詩』は王奇光または王奎とする)を謝安に喩えたものとされる。その後謝安が淝水の戦いにて苻堅を大いに破った故事は、「謝公」の語は用いられていないが、先に引いた韓翃の「寄上田僕射」(前出)で踏まえられていた。また、その淝水の戦いの際に悠然と碁を打っていたという故事(『晉書』謝安傳等)も、「謝公」の語を用いた例はずっと後の例のみであるが(李洞の「對棋」(全七二二)など)、「謝公」の語を用いなければ、杜甫の「別房太尉墓」(『詳註』一三)に「碁に對して 謝傳に陪し、劍を把りて 徐君を覓む(對碁陪謝傳、把劍覓徐君)」と、呉の季札が諸国を巡った際、徐の国の君が自分の劍を欲していたのを知り、帰りに徐に寄ったところ君がすでに亡くなっていたので、劍を墓に掛けたという故事と対にされているなどの例が見える。

唐詩において謝安が詠じられる場合、ほとんどの作品において以上の

ような面が取り挙げられており、唐詩における謝安のイメージのおおよそがうかがえよう（謝安が一族に白雪が何に似ているが尋ねたところ、姪の謝道韞が柳絮に喩えた優れた答えをした逸話もしばしば用いられるが、謝道韞を詠ずる方に中心がある）。

これを踏まえて、この聯句において謝安に比せられるべき人物として想定される裴度と令狐楚を比較した場合、確かに令狐楚も宰相となっていて、李益の「述懷、寄衡州令狐相公」（全二八三）に「江上 蕭疏の雨、何人か 謝公に對す（江上蕭疏雨、何人對謝公）」というなど、実際に謝安に喩えられることもあるのだが、やはりこの聯句が作られたまさにその時、興化池亭で風雅な宴会（そして当然そこには妓女も陪していたであろう）を開いている人物、元和十二年（817）に淮西の吳元濟の乱を平定するという大いなる軍功のある人物、ということ、やはり裴度ということになるのではないかと思われる。この聯句が令狐楚のもとに送られてきても、裴度が担当しているならともかく、韋行式の担当では、恐らく令狐楚も、裴度を差し置いて「この句は私のことだ」とは思わなかったであろう。

以上のように考えて、「謝公」は謝安のことであり、裴度を喩えたものとして解釈した。

劉に「謝公」は二例、寶曆元年（825）の作とされる「和浙西李大夫霜夜對月聽小童吹簫築歌、依本韻」（916）の例は謝朓を指すもの。もう一例、この聯句の翌大和四年（830）の「廟庭偃松詩」015に「謝公道ふ莫かれ 東山に去ると、待取せよ 陰成りて 鳳池に滿つるを（謝公莫道東山去、待取陰成滿鳳池）」という例は、「東山」というように、謝安を指すもの。序に明らかに記すように、裴度が詠じた松の詩に唱和し

たもので、裴度を「謝公」と表現したものである。

白には貞元年間から開成年間におよぶ長期にわたって七例、うち貞元・元和の二例（0612・0824）は、ともに明らかに謝靈運を指し、前者は山の斜面が謝靈運の考案した下駄にふさわしいというものの、後者は謝靈運の詩集を読んだ感想を詠じるもので、ともに比喻として用いられたものではない。その他の五例のうち、最晩年の開成三年（838）の例（3373）は、謝安を描いた絵について用いた例で、やはり比喻ではなく謝安その人を指して用いている。残る四例（1304・2760・3171・3312）は全て謝安を指しており、全て比喻として用いられている。そのうち、この聯句に先立つのは大和元年（827）の「寄李蘇州、兼示楊瓊」1304の一例、この詩題にいう李蘇州は蘇州刺史の李諒、楊瓊は妓女とされ、謝安とお供の妓女に喩えたもの。この聯句の後の三首（大和五年・八年・開成二年）はいずれも謝安によつて裴度を喩えている例である。その中で開成二年の「三月三日祓禊洛濱」（3312）那波本・宋本等は大変長文の詩題であるが、煩雑なので仮に汪本に従う）に「妓は接す 謝公の宴、詩は陪す 荀令の題（妓接謝公宴、詩陪荀令題）」という例は、劉白唱和詩における例で、東山の妓の故事を用いて裴度を謝安に喩え、裴度を侍中・守尚書令となつた後漢末の荀彧に喩えた句と対にしている。

「深眷盼」は、深く顧みる。

「眷盼（眄）」、「眷」は『說文解字』目部に「顧みるなり（顧也）」とあり、かえりみる・ふりむく意。同じく『說文解字』目部に「盼」は「白黒分かるるなり（白黒分也）」とあつて白目と黒目がはっきり別れている様子、「眄」は「目 偏へに合するなり（目偏合也）」とあつて片方の目がつぶれていることをいい（段注は「偏合」に作り両目がつぶれてい

ることと解する）、それぞれ異なる字である上に、本義は「眷」の字義と大きくかけ離れているが、古くから「顧眄」（『列子』力命・班固「答賓戲」等）の語があるように、「眄」に顧みる意味があり、また「盼」は「眄」と音が近いところから通じて用いられる。以下に引く例でも、「盼」「眄」はテキストによって入れ替わりがある。

散文においては、古くから用例が散見する。魏の夏侯恵の「景福殿賦」（『藝文類聚』六三）に「周々堂宇に歩み、東西に眷眄すれば、綵色光明にして、粲爛 流延たり（周歩堂宇、東西眷眄、綵色光明、粲爛流延）」という例は、東西の風景をぐるぐると眺め渡す意。梁の陶弘景の『眞誥』甄命授第二に「流霞の陣に軒蓋し、文昌の臺に眷眄す（軒蓋於流霞之陣、眷眄於文昌之臺）」というのも、天界を遊行する中で文昌の星の楼台を眺めるといふ例で、以下に引くものとは用法がやや異なる。

晉の王謐の「荅桓書」（『弘明集』一二）に「眷眄して未だ遺れず、猥（わづ）けて問ふに逮（およ）ぶれば、輒（すなは）ち率（おほ）ね愚管を陳（の）ぶ（眷眄未遺、猥見逮問、輒率陳愚管）」というのは、桓玄から質問されたのを、自分のことを氣にかけてくださったとへりくだって表現したもの。

唐では、大暦十二年（777）の記年を持つ梁肅の「祭獨孤常州文」（『文苑英華』九八二）に「亟（すま）かに國士の遇を承け、又た公車の薦（かたじけ）なを承くし、明誠を奉じて以て周旋し、深衷を眷盼に盡くす（亟承國士之遇、又忝公車之薦、奉明誠以周旋、盡深衷於眷盼）」という。梁肅が師事した獨孤及の祭文で、及が自分に目をかけてくれたのに応えようと努めたことを述べた部分のようである。

また、高注も引く柳宗元の「爲李京兆祭楊凝郎中文」（柳宗元集四〇）には「公の元兄は、復た德音を恵み、優游して暇多く、眷眄すること

逾（いよいよ）深し（公之元兄、復惠德音、優游多暇、眷眄逾深）」という。李實のために楊凝の祭文を代作したもので、楊凝の兄の楊憑が李實に目をかけてくれたことを表現しているようだ。

一方詩の例は少なく、唐までの詩には見当たらず、唐詩にもこの例の他には次の二例を見るのみのようだ。

元稹の「酬翰林白學士代書一百韻」0272に「千官 眷盼を容れ、五色 照らして離披たり（千官容眷盼、五色照離披）」の句がある。元和五年（810）、江陵士曹參軍時代の元白唱和詩で、白居易の原唱に合わせて自らの半生を振り返る中で、元和元年（806）の制舉に首席で合格し、朝廷の官僚に列せられたのをありがたく思うことを詠じた部分。多くの先輩官僚に仲間に加えてもらえたという光榮な思いを詠じるのに用いている。

白居易の「山中酬江州崔使君見寄」1006に「眷眄 情は限り無く、優容 禮に餘り有り（眷眄情無恨、優容禮有餘）」という。元和十三（818）年の江州司馬時代に、上司である江州刺史の崔能から送られた詩に答えた作。崔能が自分をかわいがってくれていることを詠じている。

以上の例を見る限り、やはり上から下に対して目をかけるといふ方向性が明らかに存在しているように感じられる。先に述べたように、謝安に比すべき大功があるのはやはり裴度ということになるが、ともに宰相経験者であるから、官位の上で大きな懸隔があるとはいえないであろう。令狐楚自身であれば謙遜してかく表現することもあろうが、韋行式が裴度と令狐楚に大きく差をつけたのでは失礼極まりないということになりはしないだろうか。以上のように考えて、裴度が白居易に目をかける意で解釈しておいた。

「商皓」いわゆる「商山四皓」をいう。秦末の戦乱を避けて、商山（陝西省商州市）に隠れた四人の老人、東園公・角里先生・綺里季・夏黄公。眉も鬚も白かったので「四皓」という。

漢の高祖が、呂後の生んだ太子盈之を廃して戚夫人の生んだ如意を太子に立てようとした際、張良の策によつて呂后が太子の補佐役としてこの四人を招いた。かねてから四人を尊敬しながら、招くことができなかった高祖は、これを見て太子の交代をあきらめたという（『史記』留侯世家。陶注は原文を長文で引くが、ここでは簡単にあらすじを記すのみにとどめた）。

ここでは白居易を「商山四皓」に喩えている。陶注は『新唐書』百官志四上「東宮官」の部分に「太子賓客四人、正三品。侍従して規諫し、禮儀に贊相し、宴會には則ち齒を上ぶを掌る（太子賓客四人、正三品。掌侍從規諫、贊相禮儀、宴會則上齒）」といい、『通典』三〇職官一二「東宮官」の太子賓客の条に「凡そ太子に賓客の事有るは、則ち齒を上ぶが爲にして、蓋し象を四皓に取るならん（凡太子有賓客之事、則爲上齒、蓋取象於四皓焉）」というのを引いており、太子賓客の定員が四人なのは、商山四皓に基づくとされていたようである。後に引くように、このたび太子賓客東都分司として洛陽に赴任するのが決まった際、白自身が自分を四皓に喩えた作を作っており、それを承けて、この聯句で喩えたのかもしれない。また、蔣注が引く劉の「刑部白侍郎謝病長告、改賓客分司、以詩贈別」863に「九霄的路上 朝客に辭し、四皓の叢中 少年と作る（九霄路上辭朝客、四皓叢中作少年）」というのも、この聯句の直後に、洛陽に赴任する白を送った作で、『劉白唱和集』中の詩である。【備考】

参照。

商山四皓の故事は有名で、唐までの詩にも、例えば「四皓」の詩語は、魏の阮瑀の「詩」（『藝文類聚』三六）に「四皓 南岳に潛み、老萊 河濱に竄る（四皓潛南岳、老萊竄河濱）」といい、隋の虞世基の「秋日贈王中舍」（『文苑英華』二四八）に「鶯嶺 三禪を訪ひ、商山 四皓を追ふ（鶯嶺訪三禪、商山追四皓）」というなどの例が見えるが、「商皓」の表現の例は未見。なお、前者は戦国楚の老萊子が隠遁して仕えなかった故事と対句にしており、後者は釈迦が住んだという靈鷲山で第三禪天（色界で三番目の天で、最高の享樂の比喩）を訪ねるという句と対にしている。

唐に入っても初盛唐に例は見えず、王建の「題壽安南館」（全二九七）に「塵駕の觸るるに縁らず、商皓の宅と作すに堪へたり（不緣塵駕觸、堪作商皓宅）」という句があるなど、元和期の詩人になって始めて用例が見えるようである。

劉には例がなく、白には二例。一つは先に触れた、この大和三年（829）年の春に洛陽に太子賓客として勤務することが決まったときの作「病免後、喜除賓客」2718で、「臥して漳濱に在りて 十句に滿ち、起ちて商皓と爲りて 三人に伴ふ（臥在漳濱滿十句、起爲商皓伴三人）」と、四人目の太子賓客になったことを表現している。もう一例は大和七年（833）の「送陳許高僕射赴鎮」3089に「商皓 老狂にして 唯だ酔ふを愛す、時時 能く酒錢を寄するや無や（商皓老狂唯愛酔、時時能寄酒錢無）」という例で、やはり太子賓客分司である自分自身を表現したもの。

「信輝光」「輝（暉・輝）光」は輝く、また輝き。ここでは、裴度に目を

かけられて、本当に輝かしいことだと表現したものであろう。

古く『周易』大畜の彖傳に、「大畜は、剛健篤實にして、輝光あり、日に其の徳を新にす（大畜、剛健篤實、輝光、日新其徳）」といい、また、漢の李尋が哀帝の災異に関する問いに答えた「對」（『漢書』李尋傳）に「夫れ日なる者は、衆陽の長にして、輝光の燭^てらす所、萬里、晷^{かげ}を同じくし、人君の表なり（夫日者、衆陽之長、輝光所燭、萬里同晷、人君之表也）」というなどの例がある。前者は占いの言葉らしく、具体的に何の輝きを表現しているかは明らかではないが、大畜は乾下艮上の卦で乾・艮ともに陽卦であるためとも、「剛健篤實」の徳の輝きともいう。後者は太陽の輝きを表現したもの。

唐までの詩においても、古く古樂府「傷歌行」（『文選』二七。ただし本来は「長歌行」であるべきとされる）に「昭昭として 素月明らかに、暉光 我が牀を燭らす（昭昭素月明、暉光燭我牀）」といい、阮籍の「詠懷詩十七首」其四（『文選』二三）に「夭夭たる桃李の花、灼灼として 輝光有り（夭夭桃李花、灼灼有輝光）」というなどの用例がある。前者は月の光を表現した例、後者は『毛詩』周南「桃夭」の表現に基づいて、安陵君と龍陽君の美貌の輝きを表現した例。

唐に入って用例が増える中、張九齡の「奉和聖製南郊禮畢酬宴」（全四九）に「配天 聖業を昭らし、率土 輝光を慶ぶ（配天昭聖業、率土慶輝光）」というのは、開元十一年（723）の冬至の日に玄宗が南郊に天を祭った際の詩における用例で、天子の徳の輝きを表現したもの。また、岑參の「衛節度赤驃馬歌」（全一九九）に「始めて知る 邊將 眞に富貴なるを、憐れむべし 人馬 相ひ輝光す（始知邊將眞富貴、可憐人馬相輝光）」というのは、荊南節度使衛伯玉とその馬の立派な風采を表現

した例。杜甫に五例と多くの用例があるうち、「潭州送韋員外牧韶州」（「詳註」二二）に「分符 先づ令望あり、同舍 輝光有り（分符先令望、同舍有輝光）」というのは、韶州刺史となった韋迢のおかげで、同じ郎官である自分もその光榮に浴することを表現したもので、この聯句と似た使い方の例である。

劉には例がなく、白に二例、いずれもこの聯句に先立つ例で、元和十三年（815）（818）の江州司馬時代の「文柏牀」0000に「刮削して 節目を露し、拂拭して 輝光を生ず（刮削露節目、拂拭生輝光）」という例は、柏樹で作ったベッドを磨いて出たつやのことを表現したもの。また元和十三年（818）の「三謠」其二「素屏謠」1188に「我 心に久しく 浩然の氣を養ひ、亦た爾^{なんぢ}と表裏して相ひ輝光せんと欲す（我心久養浩然氣、亦欲與爾表裏相輝光）」という例は、飾りも施さず、絵も描かれていない白地の屏風（または衝立）を詠じたもので、屏風の持つ眞・白という徳と輝きを共にしたいと述べているようである。

韋行式担当の四句の後半部分。前半で再び状況説明のような二句から起こしたのを承けて、この二句では、ともに故事を用いて、謝安に喩えて裴度を讃え、そのような立派な人物に顧みられた白居易の光榮を詠じていると解した。以上のような解釈が正しいとすれば、韋行式は唯一、自分の担当する四句の中で、令狐楚のことに全く触れていない担当者ということになる。令狐楚に関することを詠み込むのは、そんなに難しいことではなく、また礼儀としては詠み込むのが普通なのではないかと思われるが、単に詩人としての力量不足のためであろうか。あるいは何か理由があるのであろうか。

「舊德」昔の善行、かつてのよしみといったさまざまな意味に用いられることばであり、この語の解釈にもややニュアンスの違いがある。

蔣注は、徳望ある老臣という意味で解し、『晉書』何曾傳に引く、何曾が年老いて免職を乞うた際の詔に「太傅は明朗高亮にして、心を執ること弘毅、舊徳の老成にして、國の宗臣と謂ふべき者なり（太傅明朗高亮、執心弘毅、可謂舊徳老成、國之宗臣者也）」というのを引く。ずっと朝廷に貢献してきたことを「舊徳」と表現している例である。

蔣注はさらに、下の「三友」とともに令狐楚を指したと解釈したようで、この部分の担当者は裴度であると指摘する（後に詳述する）。陶注は何も触れないが、高注は蔣注を支持する。

一方、柴注は旧友、また前朝の功労のある臣とし、憲宗に寵愛された令狐楚を指すとする。そして、潘勗の「冊魏公九錫文」（『文選』三五）に「舊徳前功は、威な秩あらざるは罔し。伊尹は皇天に格り、周公は四海に光くと雖も、之に方ふれば蔑如たるなり（舊徳前功、罔不咸秩。雖伊尹格于皇天、周公光于四海、方之蔑如也）」といい、その五臣注（呂延濟注）に「耆舊の美徳、前代の功を立つるの人有れば、皆な其の功徳を序せざる無きなり（有耆舊美徳、前代立功之人、無不皆序其功徳也）」というのを引く。後漢の獻帝が曹操に九錫を与える際の詔勅で、昔の功臣はみな俸禄を与えられたことを言い、曹操の功績はいにしへの伊尹や周公にも勝るものであると述べるもの。

柴注と蔣注は大筋では似た方向の解釈といえるが、柴注の引く例は前朝とはいえかなり昔の功臣の実例が挙げられており、この聯句の場合は存命の人物のことを指しているだろうから、蔣注が引く例の方がこの聯

句には即しているといえよう。

「舊徳」の語自体は、かなり古くから多くの用例がある。

『周易』訟の六三の爻辭に「六三は、舊徳を食む、貞なれども厲し（六三、食舊徳、貞厲）」とあり、その象傳に「舊徳を食むとは、上に従へば吉なるなり（食舊徳、従上吉也）」という。これは父祖伝来の俸禄を指すとされる例。

『左傳』にも数例見えており、先に「東道」の例として引いた成公十三年の呂相のことばの中にも、「穆公 舊徳を忘れず、我が惠公をして用て能く祀りを晉に奉ぜしむ（穆公不忘舊徳、俾我惠公用能奉祀于晉）」とあり、また、「東の諸侯を征し、虞夏商周の胤にして諸を秦に朝せしむれば、則ち亦た既に舊徳に報いたり（征東之諸侯、虞夏商周之胤而朝諸秦、則亦既報舊徳矣）」とある。前者は秦の穆公が以前からの晋との友好を守って晋をたすけたことを表現したもので、旧交・かねてからのよしみといった意味であり、後者は晋が昔こうむった秦の恩義に酬いたことを表現したもので、旧恩・かつての恩義といった意味である。

また、『國語』周語上に引く、犬戎を討伐しようとした周の穆王に対して祭公謀父が諫めたことばに「吾れ聞く、夫の犬戎の樹は惇く舊徳に帥ひ、守り終るまで純固なり（吾聞、夫犬戎樹惇帥舊徳、而守終純固）」という（「樹惇帥」の解釈に諸説あるようだが、大野峻『國語』上の解釈にしたがった。明治書院新釈漢文大系、一九七五年）。韋昭の注に「犬戎は先王の舊徳に循ひ、其の常職を奉じ、天性專一にして、終身移らざるを言ふ（言犬戎循先王之舊徳、奉其常職、天性專一、終身不移）」というように、犬戎の國のいにしへの先王たちの徳のことを表現しているようだ。

その他、陳琳の「檄吳將校部曲文」(『文選』四四)に「丞相 深く江東の舊徳名臣を惟ふに、多く載籍に在り(丞相深惟江東舊徳名臣、多在載籍)」という例は、呉の將兵に魏への帰順を呼びかける檄文において、丞相曹操が気にかかる江東の旧家や功臣がみな書籍に名を残していることを述べる。これに続いて、「近く魏叔英は秀出高峙し、著名を海内に著し(近魏叔英秀出高峙、著名海内)」云々とたくさん的人物を挙げた上で、それらの人物がみな孫權に放逐されたことを述べて、帰順を薦める。書籍に載るということから古い先祖のようでもあるが、一応「近く」と断つてはいるものの後に挙げる実例は存命の人のようであり、何曾の例と潘昺の例を合わせたような用い方の例といえようか。

以上のように、散文においては多くの例があるが、唐までの詩に例がなく、唐に入ってからやや例が多くなる。宋之問の「故趙王屬贈黃門侍郎上官公挽詞二首」其一(全五二)に「韋門 舊徳を旌し、班氏 前書を業とす(韋門旌舊徳、班氏業前書)」というのは、漢の韋賢と韋玄成の父子がともに宰相の位に即いたという故事(『漢書』韋賢傳)を用いて、詩題にいう上官公(上官庭芝)とその父・上官儀の二代にわたる徳について表現したもの。兄班固の遺志を継いで『漢書』を完成させた班昭の故事を用いて、庭芝の娘の上官婉兒のことを表現した句と対になっている。

また王勃の「倬彼我系」(全五五)に「言に舊徳を念へば、憂心 切切たり(言念舊徳、憂心切切)」というのは、周以来の王氏一族の功績を述べたこの詩においては、いにしえから脈々と受け継がれた徳のことを指すであろう。

杜甫の「贈裴南都」(『詳註』一二)に「使君 舊徳を傳へ、已に見る

直繩の心(使君傳舊徳、已見直繩心)」という例の場合、題下の自注と詩の内容から、南部県令の裴某(詳細不明)が裁判を受けることになっており、その裁判のために判官の袁某(『詩』にいう使君。詳細不明)が着任するという状況であることが明らかであり、その袁氏はかねてから公正な裁判をするという評判だから、安心するようにと慰めているもの。この場合は、存命の人物のかねてからの徳という意味であり、この聯句に近い例といえよう。

白には用例がなく、劉に一例。この聯句より後の大和八年(834)、「酬浙東李侍郎越州春晚即事長句」(835)に「明日 漢庭 舊徳を徴せば、老人 争ひて若耶溪を出でん(明日漢庭徵舊徳、老人争出若耶溪)」という例。自注に記されるように、後漢の劉寵が会稽で善政を行ったので、召還されることになると、若耶の山から五、六人の老人が出てきて、寵を見送ったという故事を用いたもので、浙東李侍郎(李紳)がかつての功績で朝廷に呼び戻されることになった時に、若耶溪の老人が競って見送るだろうと述べている。やはりこの聯句に近い例といえるだろう。

「推三友」「三友」を推す。この部分の解釈にも諸説ある。

蔣注、『論語』季氏に引く孔子のことばに「益者三友、損者三友。直を友とし、諒を友とし、多聞を友とするは、益なり。便辟を友とし、善柔を友とし、便佞を友とするは、損なり(益者三友、損者三友。友直、友諒、友多聞、益矣。友便辟、友善柔、友便佞、損矣)」というのを引き、「推」を「推崇」(推賞する・高く評価する)と言い換えて、「益者三友」として令狐楚を高く評価していると解釈する。陶注は『論語』を引くのみで具体的には注していないが、高注は蔣注を支持している。

一方、柴注は「三人の友人、また琴・酒・詩をいう」として、白居易の「北窓三友」2985の詩を引く。全三十四句のうち、冒頭八句を挙げておこう。

今日北窓下 今日 北窓の下

自問何所爲 自ら問ふ 何の爲す所ぞ

欣然得三友 欣然として 三友を得たり

三友者爲誰 三友とは 誰とか爲す

琴罷輒舉酒 琴罷めば 輒ち酒を舉げ

酒罷輒吟詩 酒罷めば 輒ち詩を吟ず

三友遞相引 三友 遞ひに相ひ引き

循環無已時 循環して 已む時無し

そして柴注は、この部分を「令狐相公は琴と酒と詩の三友を大切にしていた」と訳しておられる。

白詩に即した非常に興味深い解釈ではあるが、「北窓三友」詩はこの聯句の五年後の大和八年(834)の作であり、後に見るように、それ以前の詩に琴詩酒の三友は見えない。「北窓三友」の詩を作る以前から白居易がずっとこの三友のことを口にしていた可能性も皆無ではないが、やはり「北窓三友」詩を作った大和八年頃に形作られた考え方とするのが穏当であろう。

「三友」の語の用例はあまり多くなく、『論語』の直接的引用の例および「二三の友(二三友)」の例を除けば、梁の簡文帝が太子の時、劉遵の死を悼んで従兄の劉孝儀に与えた令(『梁書』劉遵傳)に「忠賢を校

覆し、文史を推揚するに、益者三友なるは、此れ實に其の人なり(校覆忠賢、推揚文史、益者三友、此實其人)」といい、王勃の「夏日登龍門樓寓望序」(蔣清翊集註本六)に「夫れ益者三友は、則ち道術存すべく、同心二人は、則ち金蘭浴すべし(夫益者三友、則道術可存、同心二人、則金蘭可浴)」というなどの例が見える。ともに「益者三友」と表現しており、『論語』に基づいていることが分かる。

唐までの詩に一例、北齊の邢邵の「冬夜酬魏少傅直史館」(『初學記』三)に「先づ言ふ 三友を歎ずと、末に言ふ 一官を懸づと(先言歎三友、末言懸一官)」という句がある。詩題にいう魏少傅から送られてきた詩の最初に三友を賞嘆していたと述べている部分で、恐らく論語を踏まえて、益友として自分を賞嘆してもらったというのであろう。

唐詩にも例が散見するうち、この聯句に先立つものは三例、初唐の弓嗣初の「晦日重宴」(全七二)に「賞を促して 三友に依り、歡を延ばして 一卮に寄す(促賞依三友、延歡寄一卮)」といい、序文ではあるが、張説の「酬崔光祿冬日述懷贈答」の序(全八八)に「精言もて道を探り、妙識もて義を發し、戲謔して規戒に逢ひ、指諷して師表を見すに至りては、益は三友に過ぐ(至于精言探道、妙識發義、戲謔而逢規戒、指諷而見師表、益過三友)」といい、權德輿の「奉和李給事省中書情寄劉苗崔三曹長、因呈許陳二閣老」(全三二二)に「共に説ふ 漢朝 上賞を榮とすと、豈に 三友をして 馮唐に滯らしめんや(共説漢朝榮上賞、豈令三友滯馮唐)」という。

弓嗣初の作は高正臣の大晦日の宴に参加した際の詩で現存する数少ない唐代の唱和集の一つ『高氏三宴詩集』に収められているもの。この「三友」について『増訂注釈全唐詩』(前出)は、松竹梅のいわゆる「歳寒

「三友」または琴詩酒を指すとするが、先に述べたように、琴詩酒の三友は白居易に始まるものであるし、松竹梅の三友も、管見の及んだ限りでは、南宋の辛棄疾の「念奴嬌」十九首其九「戲贈善作棲墨梅者」（『稼軒詞』一）あるいは南宋末の林景熙の「五雲梅舍記」（『霽山文集』四）といった作品で取り挙げられて次第に定着したもののようである。『高氏三宴詩集』に載せられた他の七名の詩を見ても、竹は一例見えるのみで松は詠じられておらず、やはり別の意味で解すべきであろう。とすれば、これまでの例と同様、他の参加者を益友と表現したものと考えるのが穏当ではなからうか。張説の例は、詩題にいう崔光祿（崔日知）から送られてきた贈答詩について、その「益」を論じたもので、明らかに『論語』を踏まえている。權德輿の例は、詩題にいう劉・苗・崔の三曹長（詳細は不明）を三友と呼び、漢の馮唐のように低い地位に留まる人々ではないことを述べたもの。単に三人なので三友と呼んだのみとも考えられるが、『増訂注釈全唐詩』（前出）は、『論語』を踏まえているとする。

劉には例がなく、白に詩題を含めて七例、そのうち五例は先に冒頭部分のみを引いた「北窓三友」の詩題と詩中の例。残る二例、一つはこの聯句に先立つ寶曆二年（826）、蘇州刺史時代の「雙石」2206に「石は言ふ能はずと雖も、我を許して 三友と爲らしむ（石雖不能言、許我爲三友）」というもの。これはもし『論語』を意識しているとしてもごく軽いもので、詩題にいう二つの石と自分とで三人の友になるという例である。もう一例は晩年の會昌四年（844）の「狂吟七言十四韻」3631に「遊びは二室に依りて 三友を成し、住まひは雙林に近くして 四鄰に當つ（遊依二室成三友、住近雙林當四鄰）」という例。佐久注は琴詩酒の三友と解するが、東西二林寺に比すべき寺の近くに住んでいるという次の句

との対からしても、謝思煒注にいうように太室山・少室山が近いので、その二室と三友となると解釈すべきであろう。やはり『論語』はほとんど意識されていないことがうかがえると同時に、白居易自身の中でも北窓三友が定着しているわけではないことも分かる例といえる。

以上のように、白居易の三首七例は『論語』をほとんど意識せず、新しい三友を提示したものであるといえるが、同時代の人がみな『論語』から離れて自由に三友を考えるようになっていたわけではないことは、例えば呂溫の「送薛大信歸臨晉序」（『文苑英華』七二九）に「先師 益者三友と曰ひ、吾れ能く之を得たり（先師曰益者三友、吾能得之）」と『論語』を踏まえた表現がなされていることからうかがえる。

以上のような従来の用例と同時の状況に鑑み、さらに、対になる「八行」が故事を用いた表現であることも考え合わせると、やはり『論語』の「益者三友」を用いた表現と解するのがよいと思われる。

ただ、それが誰を指すかという点であるが、令狐楚ではなく白居易と解して、「推」を推薦、推挙の意味で解釈したいと思う。すなわち、令狐楚に対して、これから洛陽に赴任する白居易を益友として推薦するという解釈である。この点については、対句の構成とも関わるので、後に再び触れることにしたい。

〔新篇〕新しい詩篇。蔣注にいうように、この聯句を指すのであろう。柴注は「ここで作った新詩」と訳されており、この聯句のみならず、同時に詠じた作品（例えば⑦の聯句や【備考】に挙げた諸作をいうか）をも指しているように見受けられるが、令狐楚に宛てるといふ観点から作られているのはこの聯句のみであるから、一義的にはこの聯句を指し

ていると考えてよいであろう。

何気ない表現だが、古書には見えないことばで、管見の及んだ限りでは、次に引く謝朓の詩の例や『文心雕龍』樂府に「晉の世に逮んでは、則ち傳玄 音を曉り、創めて雅歌を定めて、以て祖宗を詠じ、張華の新篇も、亦た庭萬に充つ（逮於晉世、則傳玄曉音、創定雅歌、以詠祖宗、張華新篇、亦充庭萬）」と、張華の新しい詩を表現しているあたりが最も古い例のようだ。

唐までの詩には一例のみ。謝朓の「和劉中書繪入琵琶峽望積石磯詩」（曹融南校注本四。ただし前に劉繪の原唱を置いてこの詩は単に「和」と題するのみであるから、詩題は『藝文類聚』二七に従った）に「疾ひを移して 新篇を觀、衣を披て 起ちて淵翫す（移疾觀新篇、披衣起淵翫）」という。病氣休暇中に相手から送られた詩（すなわち原唱）のことを「新篇」と表現している。

唐に入り、初盛唐詩には用例がない。中唐になって、韋應物の「酬張協律」（全一九〇）に「公府 適々煩倦なるも、絨を開けば 新篇瑩らかなり（公府適煩倦、開絨瑩新篇）」といい、王建の「昭應李郎中見貽佳作、次韻奉酬」（王建詩集八）に「諸生 圍遶して 新篇を讀めば、玉闕の仙官も 此の才少なし（諸生圍遶新篇讀、玉闕仙官少此才）」というなどの例が見えるようになる。ともに謝朓の例と同じく、贈答・唱和詩で、送られてきた原唱を「新篇」と呼んでいる。

劉には和州刺史時代の作から開成年間の作に至るまでの三例（0879・0890・0824）、いずれも唱和詩で相手の原唱を「新篇」と呼んだもの。最も早い時期の作である、長慶四ノ寶曆二年（824〜826）の和州刺史時代の一例を挙げれば、「張郎中籍遠寄長句、開絨之日、已及新秋、

因舉目前、仰酬高韻」0879に「南宮の詞客 新篇を寄す、清らかなること 湘靈の柱を促す弦に似たり（南宮詞客寄新篇、清似湘靈促柱促弦）」という。この聯句にも参加している張籍の新作に用いた例。

白には二例、ともにこの聯句に先立つ例で、長慶四年（824）の「詩解」825に「新篇 日日に成るは、是れ聲名を愛するならず（新篇日日成、不是愛聲名）」という例は自らの詩について用いた例、大和元年（827）の「寄答周協律」822に「故人 舊を敘して 新篇を寄せ、惆悵す 江南の眼前に到るを（故人敘舊寄新篇、惆悵江南到眼前）」という例は周元範から送られた詩に用いた例。

「代八行」「八行」は書簡箋が八行であったことから、手紙をいう。「代八行」で、この聯句をもつて令狐楚に対する手紙に代えるというのである。

諸注が引く後漢の馬融の「與寶伯尙書」（『後漢書』寶章傳注・『藝文類聚』三一）に「孟陵奴來たり、書を賜ふ。手跡を見るに、歡喜何ぞ量らん、面に見はるるなり。書は兩紙と雖も、紙八行、行七字、七八五十六字、百一十二言なるのみ（孟陵奴來、賜書。見手跡、歡喜何量、見於面也。書雖兩紙、紙八行、行七字、七八五十六字、百一十二言耳）」という（柴注は「見於面也」を「次於面也〔面するに次ぐなり〕」に作る『藝文類聚』に従う）。

これを踏まえて手紙の意味で用いたと思われる例は、唐までの詩に初めて見えるようであり（散文では梁の昭明太子の「錦帶書十二月啓」其三「姑洗三月」にも見えるが、偽作の疑いが濃いという。兪紹初『昭明太子集校注』二四〇頁、中州古籍出版社、二〇〇一年）、梁の陸倕の「以

詩代書、別後寄贈」(『古詩紀』九〇)に「八行 自ら勉めんことを思ひ、一札 來儀を望む(八行思自勉、一札望來儀)」といい、北齊の邢邵の「齊韋道遜晚春宴」(『文苑英華』二二四。なお『古詩紀』一一〇の題下の注に、詩題から見ると齊の韋道遜の作と思われるという指摘がある)に「誰か能く 千里の外、獨り八行の書を寄せん(誰能千里外、獨寄八行書)」というなどの例がある。

唐に入り、李頎の「送馬錄事赴永陽」(全一三二)に「爾に贈らん八行の字、當に佳政の傳はるを聞すべし(贈爾八行字、當聞佳政傳)」といい、孟浩然の「登萬歲樓」(全一六〇)に「今朝 偶々見る 同袍の友、卻つて喜ぶ 家書 八行を寄するを(今朝偶見同袍友、卻喜家書寄八行)」というなどの例が見えるようになる。ともに自らがしたためる手紙を指しており、前者は詩題にいう馬錄事(詳細は不明)に宛てるもの、後者は家族に宛てるもの。

劉には一例、この聯句の後の開成二年(837)、令狐楚の死の知らせを聞いて詠じた「令狐僕射與余投分素深、縱山川阻修、然音問相繼、今年十一月、僕射疾不起聞、予已承訃書、寢門長慟、後日有使者兩輩、持書并詩、計其日時、已臥疾、手筆盈幅、翰墨尙新、律詞一篇、音韻彌切、收淚握管、以成報章、雖廣陵之弦於今絕矣、而蓋泉之感猶庶聞焉、焚之總帳之前、附于舊編之末」(『Og』に、「已に嗟く 萬化の盡くるを、方に見る 八行の書(已嗟萬化盡、方見八行書)」の句がある。訃報を聞いて嘆いた後に、生前書いた手紙が届いたことを詠じたもの。

白に三例、一例はこの聯句に先立つ例で、前年の大和二年(828)の「將發洛中、枉令狐相公手札、兼辱二篇寵行、以長句答之」(『Og』に「八行落泊して 雲雨を飛ばし、五字鎗鏃として 珮環を動かす(八行落泊飛

雲雨、ご五字鎗鏃動珮環)」という例。令狐楚からの手紙を「八行」の語で表現している。残る二例(3271・3292)は後の例、ともにこの意味の例で、前者は牛僧孺、後者は皇甫湜からの手紙を指すのに用いている。

さて、上に述べたように、「舊德推三友」についてはさまざまな解釈がなされているが、後半の「新篇代八行」の方は、この聯句をもって、令狐楚に宛てる手紙に代えようという方向の解釈でほぼ異論はないようだ。問題となる前の句であるが、諸注に従って解釈すると、「舊德」ある令狐楚の「三友」ぶりを尊敬する、すなわち「舊德」＝「三友」(＝令狐楚)ということになり、「新篇」によって「八行」に代えるという後の句と、対句としてのバランスが悪くなるのではないだろうか。また、諸注に従うと前の句は令狐楚のこのみを述べていることになるのに対し、後半はこの聯句(あるいはこの席上での新詩)を手紙に代えると述べており、白居易の送別の宴席なのだから、白居易のことも述べていることになる。「三友」は友とすべき人物ということであろうし、それを目的語にしているのだから「推」は推薦するという意味が最も自然ではないだろうか。「舊德」である令狐楚に対して、友とすべき立派な人物として白居易を推薦したい、その思いを込めたこの我々の送別の聯句を手紙の代わりにする、という解釈がよいのではないかと思われるのである。

この場合問題になるのは、こう解釈するとまるで初対面の人物を新たに紹介するようであり、この聯句より以前から令狐楚と白居易が親しいという事実と齟齬するように感じられるということであろう(白居易と令狐楚との交遊については、朱金城「白居易交遊統考」に詳しい。『白

居易研究』所収。陝西人民出版社、一九八七年）。ただし、これは宰相の邸宅における盛大な宴会の場での聯句であって、単に私的な楽しみの結果というだけでなく、公的な記録文書のような意味も持っていただろうから、まるで紹介状のような表現をとることもありうるのではないだろうか。

聯句の末尾は、四句あったはずのものが二句のみ残ったもの（さらにそれに続く担当者のももあったかもしれない）。かねてから功績のある令狐楚に（昔からのよしみによって）、益友である白居易を推薦し、この新しい聯句を作って、八行の手紙に代える、という。担当者は不明であるが（陶注に韋行式の担当というのは誤りであろう）、先述の通り、蔣注は裴度の担当とし、高注はそれに賛成する。

確かに、裴度と令狐楚は元和年間から関係があり（ただし、それは陰悪な関係であったが、それがこの聯句の頃には両者が高位について解消されていたこと、瞿注に詳しい）、聯句の主催者でもあるので、「舊德」のことはを用いたり、白居易を推薦したり、この聯句を手紙に代えると表現したりするのにふさわしい人物といえよう。

〔付記〕本稿は科学研究費補助金（課題番号：22520365）による研究成果の一部である。